

～ハツとしたとき出るエッセイ～



坊守のひとりごと



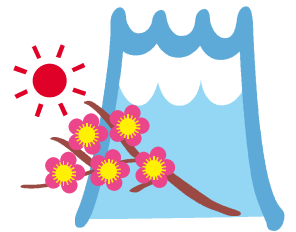
愛知県安城市和泉町中本郷41

2023年1月9日号

「我が家にコロナがやって来た」

半年ほど前に「我が家にコロナがやって来ました！」と、写経の会とお灸の会に毎月来ているIさんから明るいLINEが入りました。要するに欠席の連絡です。型どおり「たいへんですね。お大事に。」と返信しましたが、今になって思うとこの爽やかな彼女の物ごとの受け止め方に、心の広さを感じます。

実は我が家にもコロナがついにやって来たのです。昨年12月後半、家中が何となく風邪っぽく咳が出ていました。誰も熱がないのでコロナを疑う状況ではありませんでした。梅酢やビワ葉焼酎でうがいして、毎日ビワ葉温灸をしながら、何の支障もなく生活していました。



高校教諭をしている長男がやっと冬休みに入り、4回目のコロナワクチンを打ちました。過去3回と同様に翌朝から発熱して終日寝込みました。今までの疲れとワクチンの副反応だと家中が考えていました。数日しても発熱をくり返すので、念のためPCR検査を受けると陽性に。家族は当然、濃厚接触者となってしまいました。



時は大晦日、大騒ぎとなりました。お正月の準備はすべて整っていましたが寺役さんと相談し、まずは関係箇所の徹底消毒。除夜の鐘は「ご自由におつき下さい」の看板を出して元旦の新年修正会しゅうしやうえはキャンセルに。あらゆる方面に連絡を取り、本堂と庫裏くり玄関に事の経緯と対応を記した「緊急のお知らせ」を貼り出しました。寺族は全員、じっと家に籠りました。

毎年の年末年始は、連日の大掃除、餅つき、おせち作り、新年修正会の準備、娘たちの着付け準備…。除夜の鐘が深夜1時半ごろ終わり、片付けて就寝が2時過ぎ。4時半起床で着付け開始。新年修正会と年始挨拶であっという間にお昼…。考えてみると確かに重労働で、プレッシャーも半端ではありませんでした。今回すべての行事が中止になった時、ホツとして嬉しく感じたことも正直な気持ちでした。

庫裡の窓から、たくさんのご家族が、帰省された若い人たちと連れだってお墓参りをし本堂に入っていく様子を見つめていました。境内に出ることも人と直接出会うことも出来ない状況は、とても辛く感じました。あの重労働は、新年を迎える幸せの種だったと知らされました。

しばらくすると、電話やLINEで「うちも去年秋にコロナになって…」とか「うちは昨年12月に…」とか「現在、隔離中…」という情報がどんどん入ってきて、みんな同じ思いをされていることが分かりました。コロナを、何もなく過ごせる日常が本当に有り難いことを、せめて再確認するご縁にしたいものです。

坊守 樋口頼子